若者クリエイティブコンテナ（YCCU）の取り組みについて

感性デザイン工学科 助教　宋　　俊煥

1．はじめに

近年、人口減少や少子高齢化、モータリゼーションに伴い、地方都市の中心市街地の衰退や郊外へのスプロール化が進んでいます。その背景の下、持続可能な都市経営を行うため「コンパクトシティ・プラス・ネットワーク」といった考えを基に、都市機能の集約化が求められています。また、2014年に都市再生特別装置法が改正され、立地適正化計画の策定に向けた取り組みが全国で進められています。立地適正化計画により、「都心機能誘導区域」と「居住誘導区域」が設定され、人口を誘導することになりますが、主な「都心機能誘導区域」である中心市街地を如何に魅力的な都市空間に取り戻していくのかは、大きな課題とも言えます。

宇部市中央町エリアは、かつて工業地帯の後背地として盛んな街でしだが、産業構造の変化やモータリゼーションに伴い、まちなかの空洞化が進んでいます。そこで、宇部市ではまちなかを再生するための様々な取り組みを行っています。本稿では筆者が関っている若者クリエイティブコンテナ（Youth Creative Container Ube, 以下YCCU）の取り組みについて紹介します。

2．多世代交流スペースとYCCU

(1) 多世代交流スペースの整備

中央町エリアの中心部に位置する空き地を対象とし、しばふ広場とコンテナで構成する「多世代交流スペース」が整備され、2016年９月にオープンしました。多様な人々が集う場として、初期投資を抑え仮説的かつ再利用可能であることで、まちの変化に柔軟に対応できるコンテナを設置しています。コンテナは、５つで構成され、２つはカフェ、他の２つはYCCUとして使われており、残りの１つはトイレと倉庫となっています(図１)。カフェは地域住民や地域まちづくり団体（宇部未来会議）等の要望により実現できましたが、デザイン及び内装整備などの予算は、クラウドファンディングの実施により補っています。

図１　宇部市多世代交流スペースの全景

(2) YCCUの設立経緯

宇部市のまちなか再生事業の上位計画である「宇部市にぎわいエコまち計画（2015)」、「宇部市まちなか活力再生計画（2015)」の方針の下、まちなかの賑わい創出やまちづくり活動の拠点整備に関する住民意見交換会として、2015年11月から2017年１月まで約１年間、計10回の「まちなか再生ミーティング」を実施しました。その結果を「若者の活動拠点施設に関する提言書」としてまとめ、新たな取り組みとして山口大学の学生を中心とした若者の目線からまちなか再生を考える団体として、また地域の様々な主体との連携の「場」としてYCCUが設立され、コンテナを拠点に

2017年４月にオープンしました。

３．しばふ広場の活用とマネジメント体制

(1) しばふ広場の活用コンセプト

コンテナから道路を挟んで位置するしばふ広場は民地でありながら低･未利用地でした。暫定的利用として宇部市が３年更新で地主から土地を借り、地主が土地活用計画を立案した段階で返却する契約を締結しています。その借地料は、駐車場経営の場合と同等の金額に設定しています。

中央町地区は建築物等の老朽化が進んでおり、空き家・空き店舗がスポンジ状に広がっています。2017年12月時点での調査（㈱にぎわい宇部）では、中央町地区内の空き地は24.6%（地上駐車場含み）、空き物件（33.6%）となっているなど、その状況は益々厳しくなっています。しばふ広場の整備・活用の基本的な考え方は、中心市街地に空閑地が広がる中、一角を芝生に置き換えイベント等で活用することで、環境改善の効果と共にその周辺への魅力を向上させ、新たな土地利用や活用需要を高めることを目的としています。当然、現在のしばふ広場は民地なのでその地主が新たな開発行為を行うのであれば、しばふ広場は別の空地に移転するという「芝生広場化による暫定利用方式」でまちなか再生を目指しています（図２）。

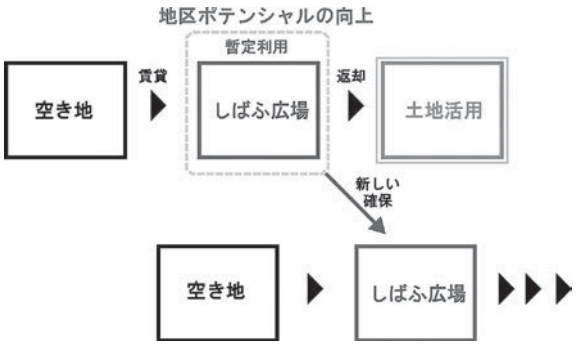

図２　しばふ広場の活用コンセプト

(2) 多世代交流スペースのマネジメント体制

宇部市はしばふ広場とコンテナの施工を実施しましたが、しばふ広場及びコンテナ等のマネジメントに関しては、月別の業務契約は宇部市が、営利関係の契約は㈱にぎわい宇部が担っており、YCCUはしばふ広場やコンテナ施設を活用するイベントや少人数のワークショップ等の調整役と管理運営を重点的に行っています。そのために今年度からはイベント等の管理・運営が専門であるマネージャーが加えられ、大学教員２名、学生６名、マネージャー１名の、９名で構成されており交代方式で毎日１名は常駐しています（図３）。

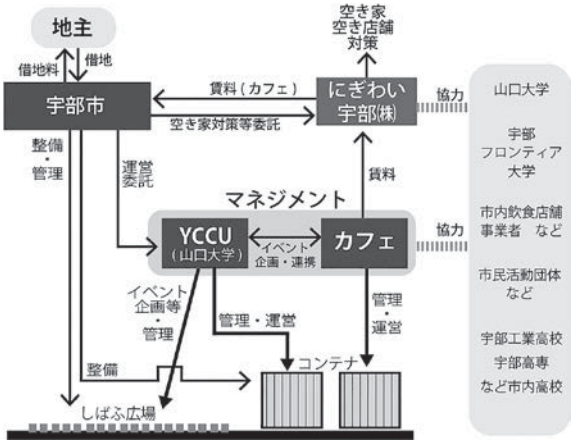

図３　多世代交流スペースのマネジメント体制

４．YCCUの実践活動

YCCUは将来的に地域のまちづくりを考える拠点施設として、いわゆる公・民・学連携によるアーバンデザインセンター（UDC）の実現を目標とし、その準備段階として必要な計画や施設の管理・運営を行っています（図４）。具体的には、アーバンデザインセンターに求められている①プラットフォーム機能、②シンクタンク機能、③プロモーション機能の３つの機能を備えていくための実験的な活動に取り組んでいます。

(1) プラットフォーム機能

公・民・学の体制を構築するために、㈱に

ぎわい宇部と宇部市、更には今年度設立した起業・創業支援センターの「うべスタートアップ（UBE START UP）」との役割分担についての検討や、地元の新たな主体を発掘するために協議や調査を実施しています。

また、定期的に「UBEサロン」を開催し、まちづくりやまちなか再生、起業・創業に関わる地元の専門家や活動家を招き、講演会や交流会等を実施することで、まちづくりに対する市民の啓蒙・啓発や、まちづくりに関わる関係者間の情報共有や連携ネットワークを構築しています。特に、今年度の２回目の「UBEサロン」は、山口大学感性デザイン工学科３年生の設計演習で提案された中央町エリアの再生案の発表の場として開催され、しばふ広場に行政や地元の住民等が集まり、熱い議論が行われました（図４）。

図４　しばふ広場で行われる「UBEサロン」

(2) シンクタンク機能

「学」の立場から、新たなまちづくりに係る「研究・提案」を行っています。昨年度（2017年度）は、学生主導によるポケットパークの空間デザインの提案を行いました。宇部市では、多世代交流スペースの周辺の街路環境整備の一環として、飲食店が密集している主要道路とつなぐために、空き家を撤去しポケットパークを含めた回遊道路の整備を実施しました。YCCUの学生メンバーを中心に、行政と連携しながら空間デザイン（案）を提案し、２回にわたる地域住民の意見交換会を行うなど、住民参加型の空間デザインの提案を実験的に実施しました（図５）。今年３月にポケットパークはオープンしており、現在飲み屋街からしばふ広場への新たな人の流れができています（図６）。それ以外にも、中央町エリアの大きな課題でもある駐車場問題の解決に向けた時間別の駐車利用の実態調査や、賑わい創出のための社会実験の検討など、中央町エリアを対象としたシンクタンクの拠点としての役割を担っています。

図５　地域住民意見交換会の様子

図６　空間デザインの提案（左）と整備完了（右）

(3) プロモーション機能

中央町地区のまちづくり窓口として機能するためにYCCU専用のHPやSNSを製作すると共に、㈱にぎわい宇部と連携しながら地域の多様なイベントの情報を地域に発信しています。特にYCCUやコンテナカフェ、地域活動家等がまちなかイベント実行委員会を立ち上げ、行政と㈱にぎわい宇部の支援をいただきながら、しばふ広場を市民に知ってもらうための集客イベントを企画・実施しています（図７）。この集客イベントは、若者など、今

まで地域のイベントに参加しなかった年齢層がまちなかに足を運ぶきっかけをつくることを目的としており、単発的なイベントに終わるのではなく、定期的かつ、持続的に続けられる仕組みを検討しています。そこで今年度５月にYCCUを事務局とし、「まちなかイベント実行委員会」を立ち上げました。本実行委員会は、中央町エリアに位置する「多世代交流スペース（しばふ広場）」、「わいわいぱぁ～く」、「銀天街」を対象に、イベント実施を促進することで地域再生や活性化を目指すことを目的としています。通常、野外でイベントを実施するには保健所、警察署等への各種申請など多くの事前準備が必要となります。そういったイベント実施過程上の手間を本実行委員会でサポートし、各種申請の補助・備品の手配・企画・広報・運営など、様々な必要なことを一括してマネジメントすることで、イベント実施のハードルを下げ、各個人事業者でもイベントの主催及び参加がしやすい環境づくりに取り組んでいます（図８）。

図７　しばふ広場のガーデンフェスタの様子

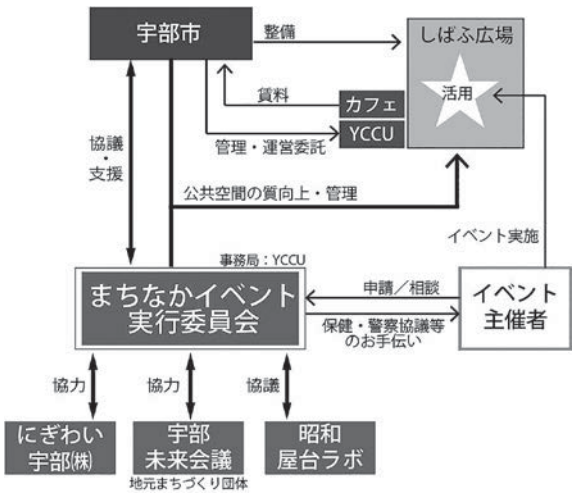

図８　しばふ広場の活用支援システムの構築

５．おわりに

宇部市の中央町エリアでは、コンパクトシティの実現に向けて魅力的な都市空間への再編のために様々な活動を始めている、いわば始動期であり、その活動の一つとして多世代交流スペースやYCCUが位置付けられています。また、YCCU活動は、基本的に宇部市の受託研究の基に行われており、事務的な手続き等、山口大学の手厚いサポートをいただきながら進めています。

多世代交流スペースは、大きな公共投資が難しい中、地域の遊休空間の利活用と暫定利用方式により、その周辺の土地や資産の価値を取り上げることを目的として整備されましたが、できあがったしばふ広場などをどう市民の利用頻度を高め、かつ持続的にマネジメントしていくのかは課題と考えられます。人口密度が低く、自動車中心の地方都市において、市民が利用できる空間が整備されても、実際にあまり利用されないという問題もありますが、しばふ広場を活用した集客イベントを続けることで、少しずつ地元のプレイヤーも増えており、また面白い企画ができるようなマネジメント体制が徐々に整っています。これからも中央町エリアを研究フィールドにYCCUの実践活動を進めていきます。中央町エリアが３～40年前のように人があふれるまちを取り戻すのは難しいことと思いますが、宇部市民が週末に少しでも寄ってみようかと考えられる「面白い、魅力のあるまち」、「人々のアクティビティがあふれるまち」になっていくことを期待しながら、これからも協力していきたいと考えています。